

短歌コンクール 作品発表



最優秀賞 藤山亜莉沙さん

陽炎にゆるぶ天地(あめつち)張りわたし 蝉は一世(ひとよ)を七日にいな
暑さに人も空気も緩むような中で、蝉の声がびんと通っていく。それは、七年間土の中で過ごした一生を短期間に鳴いて終える生の緊張感でもある。
Twitter:@utakusaで細々短歌を再開したいと(ずっと)思っています。応援ください。



優秀賞 岸本紗也加さん

街角の 花火に見惚れ 立ち止まる 儚き生命 (いのち) に 未来捧げて
街角の花火は紫陽花(あじさい)のことです。コロナの影響でしょうか。大花火を見る機会が減りました。買い物に出かけてふと見かけた紫陽花。花火にとてもよく似ています。その小さくも華やかで、はかなさをまとった紫陽花に、コロナ禍を打破する明るい未来を垣間見ました。



奨励賞 黒田早織さん

列島で初めてスイカを植えた人「不要不急」とやじられたのか
私は新聞記者をしている。コロナ禍まった中だった昨年4月に入社。新人だった私は時局のど真ん中のコロナ取材に関わることは少なく、周辺的な街のニュースを出すことが多かった。時の首相が「不要不急の外出を控えよ」と叫び、誰もがコロナ関連情報を求めている中で、私は自分の記事が「不要不急」にしかみえなかった。それまでは「不要不急」こそ社会や人生の余剰性であり豊かさだと思っていた。なのに社会に出たら、自分の仕事が不要不急かもしれないことが心から苦痛で心細く、そして社会に対してなんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。それでも、取材して記事を書いてお給料をもらっている以上、紙面をいろいろなニュースで埋めるという職務を全うしなければいけない。雇われ労働者としての記者の悲哀と迷いを詠んだ一首。

ご応募ありがとうございました！

匿名	見つめ合う二人を隔つ布マスク 逃した隙の 口惜しきかな
岸本紗也加さん	台所 小さな夏の 便り来る 湿った風に コバエ揺られて 初物を 頬張る先に オヤジの手 穴粟に伝う 農作の知恵 にらめっこ・君の強さに・消沈す・裏切らないで・きょうの空よ
黒田早織さん	我れプロレタリアートプロレタリアート 不要不急の記事を書こうよ ふようふきゅう 「誰かの役に、それ、立つの？」私を縛る言葉 ふようふきゅう とは言いつつ。不要不急が積み重なりヒトはここまで発展した。よね？ もし私いまこの瞬間死んだとする。明日の紙面は変わらず埋まる 「じっと見つめあえば吸い込まれちゃいそう？」いいえ、私が吸い込んだじゃいそう あなたを咬みたい。歯はね返る肉の弾み。愛の証し。嫌がらないで
水森百合子さん	おばあちゃん ハスカップジャムで 止め刺す くるしいお腹 うれしい心
河原沙也加さん	街を登ち 列車に揺られ 山郷へ 新樹の薫りに もの思う午後
須和憲和さん	外出を ひとり戸惑い 五輪見る 夜空いっぱい 星野そら 猛暑いや ひとりひっそり かき氷 昼はひるねで 星空みつめる
岸本康希さん	さあいくぞ・オンザプレイン・大木が・ほぼブロッコリー・もう帰ろうか 茹ですぎね・オクラがネバネバ・ネバネバね・なぜか思い出す・あの子みたいね おいトマト・サラダボウルの・番長よ・俺は旧友に・懂れている